

(4) 運営指導委員会について

10月と2月の2回開催した。各校が実践している遠隔授業及び探究的な学びについて、運営指導委員の方々から多くの専門的見地による指導・助言をいただき、事業の充実・改善により一層弾みをつけたところである。

①第1回運営指導委員会（令和7年10月10日）

◇遠隔授業について報告

○第一高校より

- ・週2日の「自主演習（生徒による解説）」と、週3日の「共通テスト演習（教員による解説）」の二本立てで構成。
- ・2台のモニターで自校・他校の映像を使い分け、遠隔地からカメラ操作を行うことで生徒の作業状況を把握。
- ・電子黒板の導入により、他校生徒の板書を共有したり直接書き込んだりすることが可能になり、解説の質が向上。

○小国高校より

- ・3校からの配信授業により、小国高校単独では困難だった多様な学びと進学実績の向上を実現しつつ、運用面の調整や対面サポートの必要性が課題となっている。
- ・第一高校（数学）、球磨中央高校（マーケティング）、八代高校（英語）の3校から配信を受け、進学・就職両クラスで多様な学びを展開。
- ・他校の生徒や専門性の高い授業に刺激を受けることで学習モチベーションが向上し、受講生から国公立大学合格者が輩出されるなど明確な実績が出ている。
- ・配信校とのノウハウ共有や教員間交流により、学校全体の指導力底上げに寄与。
- ・学校間の日程調整やスクリーングに伴う出張対応の負担、また遠隔授業における「受信側での対面サポート」を行う人員確保が課題。

○球磨中央高校より

- ・中山間地域の共通課題をテーマに、ICTツールと実習（球磨中央百貨店）とを連動させ、学校や学年の枠を超えた実践的・協働的なマーケティング学習を展開している。
- ・自校の「球磨中央百貨店」や小国高校の販売活動と授業をリンクさせ、座学だ

けでなく商品販売などの実務に即した学びを提供。

- ・全生徒が Google Meet でスライドを手元確認できる環境を整え、スプレッドシートや探究シートを用いてリアルタイムに意見を集約・共有。
- ・人口流出などの共通する地域課題を題材に、山間地域の資源をどうサービスに繋げるかという当事者意識の高いグループワークを実施。
- ・学校間で異なる評価基準を「評価材料(ポートフォリオ等)の統一」で補完し、年2回の受信側視点のフィードバックを通じて授業改善を継続。

○牛深高校より

- ・県立教育センターより専門的な「情報探究」の授業を配信形式で受講。
- ・3年生を対象とし、事前に配布されたプリントやスライドを活用した共通テストに対応した内容を展開。
- ・配信側の講師に加え、自校の教員が教室に常駐。日程調整やプリント配布、生徒への対面フォローといった役割分担を徹底。
- ・教員と生徒が和気あいあいと交流できる雰囲気が醸成されており、心理的なハードルの低い遠隔授業が実現。

○岱志高校より

- ・荒尾市の「暮らしたいまち日本一事業」に基づいた探究活動に対し、人吉高校のスーパーティーチャーが客観的な視点で助言。
- ・一斉授業ではなく、全9グループに対する「1班10分間の濃密なオンライン面談」形式を採用し、具体的なアドバイスを提供。
- ・6月の「課題設定・進め方」の面談を経て、10月に「進捗確認・最終化」の2回目を実施するという計画的なステップを構築。

○県立教育センター(鹿本高校)より

- ・履修生徒数8名であるため、生徒の座席を半円形に変更することで表情を把握しやすくし、Google Classroom のコメント機能と資料配信で質問対応を補完。
- ・夏休み明けに適切なタイミングで対面授業を実施し、画面越しでは埋められない距離感を解消。
- ・生徒のつまづきを察知しても、放課後の個別指導が物理的に難しく、再説明が1週間後になってしまうという遠隔特有のタイムラグが課題。
- ・教育センターの先生方からの助言をいただくことができる。
- ・配信拠点(教育センター)への移動時間が負担となっており、持続可能な配信体制の検討が必要。

○運営指導委員より

- ・生徒側のネガティブな意見はほとんど見られないものの、運営面では「日程調整」が最大の課題として依然として残っている。
- ・遠隔授業は「アウトプットの質の向上」や「未設置科目の履修」という大きな恩恵をもたらす一方、機材操作による「時間のロス」や「対面志向」といった課題も併存している。
- ・高校現場では大学以上にリモート環境が定着しており、熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク事業を通じて遠隔授業が「日常的な学びのツール」として確実に浸透している。
- ・(下の第一・小国両校の説明を受けて) 単なる映像視聴ではなく、双方向のやり取りがあるからこそ、個別の学習を超えた「学びの深まり」が実現できていると実感した。

＜小国高校側＞幼馴染ばかりの環境を飛び出し、熊本市内の他校生へ解法を解説する「高いハードル」を越える経験が、大学合格を支える深い学びに直結した。

＜第一高校側＞遠隔先の生徒が真剣に発表する姿を見ることで、自校の生徒にとっても良い刺激や学びの機会が生まれている。

◇探究的な活動について報告

○第一高校より

- ・1年（基礎・ビブリオバトル）、2年（論文選定・分野別研究）、3年（個人論文・全校発表）と、3年間でステップアップする論文作成指導を徹底。
- ・熊本市市街地整備課の監修を受け、有志生徒が大学生と共に「花畑広場」の活用や賑わい創出を月1回の「青空会議」で企画。
- ・学年ごとの段階的な論文指導で「論理的思考」を養いつつ、有志による「花畑広場プロジェクト」を通じて、実社会の課題解決に挑む実践的な学びを展開している。

○小国高校より

- ・地域資源をビジネス化する「高校生がつくるギフト」を核に、CORE ハイスクール・ネットワーク事業等のネットワークを駆使した多校・異業種連携により、実践的な社会実装の学びを実現している。
- ・球磨中央高校での販売実習（球磨中央百貨店）や第一高校との「花畑広場まち

づくりプロジェクト」コラボなど、他校の専門性（商業等）に触れることで普通科生徒の視界を拡大。

- ・牛深高校の海産物と小国郷の温泉（蒸し場）を掛け合わせた「茶碗蒸し」開発など、遠隔交流から具体的なイノベーションを創発。

○球磨中央高校より

- ・学科を問わず全ての授業に探究の要素を導入。簿記で震災後の財務諸表を分析するなど、専門科目と社会課題を密接にリンク。
- ・豪雨災害の経験を踏まえ、全クラス・全授業で防災視点のカリキュラムを実施。備蓄品作りや地理的分析を通じ、将来の地域リーダーを育成。
- ・「球磨中央百貨店」を単なる販売実習から、普通科も含めた地域課題解決の場へと昇華させ、地域事業所と一体となった運営を実践。
- ・韓国料理店との共同開発アイスが「ふるさと納税返礼品」に採用。生徒商業研究発表大会で県優勝・九州2位に輝くなど、客観的にも高く評価。
- ・1年で地域を知り、2年で提案、3年で自身のライフプランに繋げるという、3年間を見据えた体系的な探究フローを確立。

○牛深高校より

- ・コンソーシアム委員長の崇城大学の内藤准教授の発案で、「日本一ユニークな教育」を目指して「イノベーション創発」をテーマにした夏合宿を初開催。
- ・小国高校から5名の生徒がオンラインで参加。地理的距離を越え、他校生と共に学ぶ「くまモンプロジェクト」の一環として展開。
- ・地域の振興課長や地元住民を交えた夜の座談会を実施し、学校内だけでは完結しない「地域に根ざした学び」を深化した。
- ・合宿での出会いを一過性にせず、12月の「学びの祭典」での再会や、その後の共同商品開発（茶碗蒸しプロジェクト等）へ接続。

○岱志高校より

- ・1年次で地域活動家から課題を学び、2年次には荒尾市の「暮らしたいまち日本一事業」と連動した具体的な解決策を実行。
- ・小学生・高齢者向けの「スマホ教室」や、地場産業「小代焼」の市民向け講座を生徒自らが企画・運営し、市役所や大型商業施設で実践。
- ・有明高校との合同成果発表会や、水俣高校との協議、IT専門学校での講義受講など、他校との交流を質的向上に活用。
- ・遠隔システムを活用し、人吉高校のスーパーティーチャーから探究内容への専

門的な助言を受ける体制を構築。

○運営指導委員より

- ・授業内容（コンテンツ）を共有する段階から一歩進み、地域コミュニティの中に「学び」をどう組み込むかという視点の転換が必要。
- ・従来の縦（組織内）や横（同業種）の連携に加え、利害関係を超えた多角的な「斜めの繋がり」がコミュニティ活性化の鍵となる。
- ・現在の活発な活動を「地域共創」の視点で再定義することで、次世代の地方自治や教育モデルに資する貴重な知見が得られる。
- ・「全校規模の探究」と「有志による実践」の成長の差（第一）、および「全教科探究」がもたらした教職員・生徒への波及効果（球磨中央）について

<第一>

- ・授業（総探）では「読解力・プレゼン力・データ処理」といったアカデミックなスキルが育ち、有志活動（花畑PJ）では「アイデア創出・合意形成・協働力」といった非認知能力が育っている。
- ・資質能力は発揮する場があって初めて育成されるため、活動内容の違いがそのまま「育つ力の違い」に直結するという指摘。
- ・論文執筆による知識の連結や、プロジェクト推進による人間的成長など、試験の数値に表れない学力をどう評価し、価値付けるかが重要。
- ・有志活動で見せる生徒の目覚ましい成長を「一部の特別な例」とせず、それをヒントに学校全体の教育課程（カリキュラム）をどう進化させるべきか議論が必要。

<球磨中央>

- ・「全授業に探究を」という方針のもと、学期ごとの授業評価や職員研修を通じ、教員自身も「教え込む授業」から「問いを立てる授業」への価値観転換を模索中。（学校より）
- ・現状は「防災」という共通テーマを全科目で扱う形だが、これが土台となり、教員間での工夫の共有（落とし込み）が始まっている。（学校より）
- ・①内容(防災等)の共有から、②資質能力(分析・表現力)の育成、③学び方(協働性)の深化へと進むことで、探究が真の「手段」になるとの指摘。
- ・知識伝達型から探究型へ学校全体を動かしていく「変革のプロセス」自体が、他校にとっても極めて貴重な知見（シェアすべきヒント）である。

- ・遠隔授業を「理論」とし販売実習を「実践」とする高次元の連携が進む中、次なる焦点は「教職員の意識をどう変え、校内体制をいかに強固にするか」という組織文化の変革に移っている。
- ・探究学習を全校規模で定着させるには、一部の担当者だけでなく、教職員全体の価値観（教え込む授業からの脱却）をどう変えるかが共通の最重要課題。
- ・これまでの試行錯誤を経て、「今年はこちらを変えたら手応えがあった」という現場発の具体的な成功事例（小さな変化）を共有し合うフェーズに突入。
- ・探究学習の導入による業務増という課題はあるが、それを乗り越える「地域を活性化させたい」「良い未来を残したい」という先生方の熱意こそが最重要。

②第2回運営指導委員会（令和8年2月18日）

◇探究的な活動について生徒発表

○第一高校より

「花畑広場まちづくりプロジェクト」は、有志生徒が主体となり、世代や国籍を超えた交流と地域の賑わい創出を目指す活動です。10月の試行を踏まえ、2月のイベントでは「究極の2択クイズ」や「モルック」「消しピン」など、アナログな遊びを通じた対話を重視。地形を活かした空間設計や季節行事（福笑い）の導入で、子供から大人まで「童心に帰り全力で遊べる場」を構築し、広場への愛着と地域一体感を醸成します。

○小国高校より

小国高校の「OGUNI-GO プロジェクト（高校生がつくるギフト）」は、深刻な人口減少に対し、地域の特産品をカタログギフト化して販売する地域共創ビジネスです。大学連携講義で得た理論を軸に、昨年度の「売れない悔しさ」を糧に営業力を強化。熊本商業や岱志高校との合同CM制作や営業リスト共有で商圈を拡大しました。今年度の球磨中央百貨店では、対面販売の工夫により売上2倍を達成。オンラインの絆をリアルの成果へ繋げ、地域の未来を切り拓いています。

○球磨中央高校より

球磨中央高校は、3学科の専門性を融合させた実践的な探究活動を展開しています。「球磨中央百貨店」では小国高校と連携し、マーケティング理論を導入して売上を大幅に更新。経営者視点への意識変革を遂げました。また、地産地消のアイス開発では商談会参加やふるさと納税採用など、本格的な社会実装

を実現。データ分析等の課題を力に変え、「不可能な夢」へ挑戦する生きた学びを通じて地域貢献を目指しています。

○牛深高校より

牛深高校は、地域活性化を目的としたロゲイニング大会を企画・運営しました。ターゲットを若年層に絞り、RPG風の広報や競技部門の新設、地元店舗とのコラボ商品開発を戦略的に実施。結果、参加者数は前年比2倍の214人を記録し、費用を上回る約27万円の経済効果を生み出しました。アンケートでは8割以上が活性化への手応えを感じており、歴史的魅力の再認識と生徒の企画実践力が結実した「生きた学び」となりました。

○岱志高校より

地域課題解決の一環として小学生向けの「スマホトラブル防止教室」を実施しました。高額課金問題に焦点を当て、動画を用いた出前授業を実践。事後アンケートでは9割以上の児童の意識変革に成功し、相談窓口「188」の周知も図りました。一方で、課金の是非を多角的に伝える必要性や説明の具体性など、教育的視点での深い反省も得ており、次年度へ繋がる質の高い探究活動となりました。

○運営指導委員より

- ・「スマホ＝悪」に見えないよう、利便性とリスクの両面を伝える表現に。生徒自身が反省点として気づけていた点は素晴らしい。(岱志)
- ・課題解決のプロセスだけでなく、活動を通じて生まれた「想定外の新しい価値」についても触れるとより深みが出る。(球磨中央)
- ・タイトルの「進化」は突然変異、つまり「想定外の事象」を指す。連携の中で起きた「予想もしていなかった変化」をPRポイントに。(小国)
- ・市外・県外からの流入データを明確に。アンケートは「全選択肢」を明示した上で結果(0%含む)を示すと、客観性が高まる。(牛深)
- ・「広場のブランド価値向上」が目的なのか、広場を手段とした「多世代交流のコミュニティ作り」が目的なのか、軸足を明確に。(第一)
- ・全校が「提案」に留まらず、「実践」まで完遂した責任感と行動力を高く評価。
- ・試行錯誤して昨年の課題を克服した今、あえて「新たに見つかった壁」や「次への宿題」は何か。そこから探究の真の深まりが生まれる。

- ・他校から得たのは知識やアイデア（広報戦略など）だけか。連携したことで「自分の地域を客観視できた」「仲間ができて勇気が出た」など、言葉にしにくい感情の変化はあったか。
- ・既存の課題を改良するだけでなく、小国高校の事例のように「買い手の気持ち」という全く別の視点に気づくことが重要。この「思考の跳躍」は生徒だけでは難しく、先生方の伴走が鍵となる。
- ・「マーケティングの手法」といった形式知は言語化しやすいが、交流を通じて生じた「心の動き」を言葉にすることは難しい。しかし、ここを言語化できるかどうか学びの深さを左右する。
- ・生徒が自分の内面的な変化に気づけるよう、適切なリフレクション（振り返り）の機会を設け、先生方がその言語化を粘り強く支援する体制構築が今後の課題である。
- ・現場で得る「一次情報」の尊さと、授業やフレームワークで学ぶ「二次情報（既存の知見）」を使い分ける実践が素晴らしい。この往復こそが、深い洞察を生む鍵となる。
- ・オンラインでの繋がりがリアルな対面へ変わる瞬間の熱量を大切にすべき。この「会える」体験が、活動のリアリティとモチベーションを飛躍的に高める。
- ・県内の尖った探究活動を一覧化し、互いのイベントへ足を運び合うような「越境する学び」のプラットフォーム化を提案。
- ・組織の枠組みを超え、生徒同士が直接繋がり、互いの地域の特色を「借り合う」ことで、熊本県全体の活性化へと発展させていくことを期待。

◇遠隔授業について報告

○第一高校より

小国高校に対し、3年生数学の遠隔授業を配信した。電子黒板の活用や年2回の対面授業を組み合わせることで、双方向の刺激がある学びを実現。ネットワークの不具合をYouTube録画活用などのノウハウ蓄積へ繋げ、受験対策にも応用した。演習中心のため協働の深まりに課題を残したものの、遠隔授業のスキルが学校全体にも良い影響を与えた。

○小国高校より

小国高校は、他校からの遠隔授業を通じ、小規模校ゆえの課題を克服してい

る。第一高校の数学では、多人数での競い合いが大学進学への意欲を醸成。球磨中央高校のマーケティングでは、専門知を販売実習へ即座に還元し、昨年比2倍の売上を支えた。遠隔地のスクーリング調整や教員サポートに課題を残すものの、志望に応じた科目選択の拡大と進学実績の向上が、生徒の未来を大きく広げている。

○球磨中央高校より

球磨中央高校は小国高校に対し、実戦型マーケティング授業を配信した。共通のフィールド「球磨中央百貨店」の課題解決をゴールに据え、ペルソナ設定等の理論を実践に直結。学年や専門性の異なる生徒同士がスプレッドシート等で意見共有し、互いに刺激し合う環境を構築した。他県の先進事例視察も行い、評価基準の統一や対面指導を組み合わせることで、遠隔授業の枠を超えた「経営参画型」の学びを実現している。

○牛深高校より

「情報探究」の授業では、8名の生徒が挙手やチャットで積極的に意思表示を行い、双方向の対話を実現。Classroomによる手厚い事後フォローもあり、学力が向上した。操作の容易さから受信側教員の負担も抑えられており、生徒の進路希望も支える持続可能な学習モデルとなった。

○岱志高校より

「総合的な探究の時間」において、人吉高校と結んだ遠隔指導を実施。全10班がそれぞれのプロジェクトをプレゼンし、人吉高校の指導教諭（スーパーティーチャー）から客観的かつ忌憚のない助言を受けることで、生徒は新たな気づきを得て探究を深化させた。この試みにより、オンラインを活用したスーパーティーチャーや専門家との連携の有効性が実証され、校内だけでは完結しない「開かれた学び」の可能性を感じた。

○県立教育センター（鹿本高校）より

遠隔特有の「視線が合わない」課題を個別指名で克服し、後半には生徒が自発的に議論する場を創出。指導上の課題も反省しつつ、「生徒に次は無い」という強い責任感で授業に臨んだ。「なぜ情報を学ぶのか」という根源的な問いを柱に据えた授業を展開。画面越しであっても、生徒が根拠を持って自分の考えを構築できる「達成感のある学び」を追求した。

○運営指導委員より

- ・現場で生まれた「困りごとへの対処法」を高校教育課が中心となってまとめ、新しく参画する学校の道標とすべき。
- ・優れた授業コンテンツを届けるだけでなく、受け手となる生徒がいなければ成立しない。生徒が自ら「受けたい」と思うためのインセンティブ（意欲喚起）をセットで考える必要がある。
- ・大学進学といった「わかりやすい理由」の先にある、生徒の知的好奇心を刺激する仕掛けをシステムとして組み込むことが、遠隔授業の普及と深化の鍵。
- ・画面越しでは把握しきれない「生徒一人ひとりの表情や思考」をフォローするため、学習支援員の配置など、現場の負担を物理的に軽減する予算措置が必要。
- ・学校間での時間割調整は負担が重い。県が主導し、「このエリアは時間割を統一する」といった標準化を進めることで、恒常的なオンライン運用の土壌を整えるべき。
- ・単に ICT を使うことが目的化してはいけない。スプレッドシート等で「他者の考えと比較し、自分の考えを再構築する」といった、デジタルだからこそ可能になる「深い学びの知見」を、成功法則として体系化する必要がある。
- ・遠隔授業が「リアル授業の補完」なのか、あるいは「遠隔授業こそが主役」となる講義なのか。反転学習との相性など、これまでの経験から導き出された「教育形態の向き不向き」を体系的にまとめる時期に来ている。
- ・既存の課題を解決する「PDCA サイクル」に留まらず、異なる背景を持つ生徒や地域が繋がることで、今までになかった新しい知見や価値（化学反応）を生み出すことを活動の真の目的に据えるべき。
- ・地方が抱える閉塞感の原因は、新しいつながり（新結合）が起きていないことにある。遠隔教育をその加速装置として位置づけ、「想定外の新しい答え」が次々と生まれる報告会を目指してほしい。

(5) 地域課題解決に向けた探究的な学び（くまモンプロジェクト）について

熊本版 CORE ハイスクール・ネットワーク事業において、ネットワークを構成する多様な地域（熊本市・阿蘇・天草・人吉球磨・あらたま地域）が一体となって地域課題解決に向けた探究活動を行うことにより、地域への貢献及び生徒の「生きる力」の育成に寄与することを目的としたプロジェクトである。各学校で実施している総合的な探究の時間などの探究的な学びについて、ネットワーク構成校同士で連携し活動に取り組んでいる。手法として、過程や成果をクラウドで共有したり、イベントと一緒に参加したりするなど、ネットワーク構成校のさらなる連携につながっている。

また、各学校の特色や強みを活かした取組を重点的に推進する「熊本スーパーハイスクール (KSH) 構想」に取り組む高校魅力化推進室と連携し、令和7年12月20日には「KSH 生徒研究発表会 県立高校学びの祭典」において、CORE 事業のブースを出展し、遠隔授業の取組なども含めた各学校の取組の紹介を行った。

各校の取組は「(4) 運営指導委員会について」で詳しく触れているため、ここでは各校の取組の様子を資料から紹介する。

【第一高校：花畑広場まちづくりプロジェクト】

花畑広場まちづくりプロジェクトとは

高校生が主体となり花畑広場で感じたことや考えたことをイベントとして表現することで、イベント実施時の達成感や花畑広場や街なかに愛着や関心を持ってもらうこと。
(シビックプライドの醸成)



マルシェ班

花畑広場がさまざまな年代層の交流の場となることを目標とする

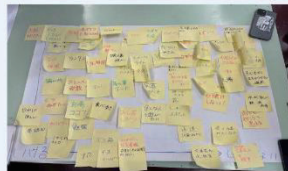
カルチャー班

熊本の文化を軸に、花畑広場をとおして異文化の交流や伝統の継承を目標とする



プレイスメイキング班

多くの人にとって花畑広場が心地よい存在になることを目標とする



花畑プロジェクトメンバーのイベントを開催 予定

企画名：「つながる笑顔、つながる世代 - 花畑交流フェス -」
開催場所：辛島公園（芝生広場・多目的広場）
開催日：2026年2月22日（日曜日）
開催時間：13:00～17:00（4時間）
準備時間：11:30～13:00（1.5時間）
撤去時間：17:00～18:00（1時間）
対象者：すべての人
年齢制限：なし、参加条件：なし、参加費：なし
宣伝方法：市公式SNS（LINE・X）、
花畑広場公式SNS（X・Instagram）、市のイベントHP（すぐーる）

目的

様々なイベントを通して、地域間の仲を深め、更に異世代との交流も行うことで、地域一帯という実感を持たせるため。また、今回のイベントを通して、花畑広場まちづくりプロジェクトという活動や、花畑広場の魅力を知ってもらうため。「花フェス」と略することができるため、親しみのあるイベントにすることが狙い。

【小国高校：OGUNI-GO プロジェクト】

2025

教室から地域へ踏み出す 「OGUNI-GO プロジェクト」

～学校間連携で加速した「協働」と「進化」の物語～

チーム名：OGUNI-GOプロジェクト営業班
メンバー：小国高校2年生5名

問い：地域課題は、ボランティアだけでは、持続可能にならない！

熊本大学連携講義①
1. **地域共創**：地域課題をビジネスで解決する
2. 人口減少と地域共創について

熊本大学 尾山真 准教授

熊本大学連携講義②
地域のゲストスピーカーの事例
熊本市 山本浩平 氏
熊本県 山本浩平 氏

熊本大学 金岡省吾 教授

仮説：協働×地域共創で解決できるのでは？

地域の魅力を「編集」し「贈る」

高校生が作るギフト [小国郷の事業者] ⇄ [高校生(Hub)] ⇄ [購入者]



特徴① 売上の一部が学校に返ってくること
特徴② 他校もこのプログラムを導入できること

今年度の活動（広報や販売・営業）



仮説2：学校間連携するとさらに広がるのでは？

学校の壁を越えた「商圈拡大」

高校生が作るギフト
営業先リストの共有
スプレッドシート
熊本商業高校

合同販売チラシ
熊本商業高校 × 国志高校 × 有明高校
熊本放送 (RKK)
熊本商業高校 × 国志高校 × 有明高校

テレビCM撮影と放映
10月14日～11月30日
熊本放送 (RKK)



一方、その頃、
マーケティングの授業（先輩方の様子）
球磨中央高校 高濱さおり先生

熊本県のCORE/ハイスchool・ネットワーク



先輩方による球磨中央百貨店のSNSでの事前告知
小国高生、「球磨中央百貨店」再参戦！
小国高生、「球磨中央百貨店」再参戦！
球磨中央百貨店 (RKK)

⇒先輩方と一緒にリベンジに！

球磨中央百貨店（11月29日）
画面越しの仲間と対面

「本物だ！」



オンラインの絆がリアルで繋がった瞬間

球磨中央百貨店（11月29日）
宣伝放送！ 商品説明！

ポディクリーム体験！ チラシ&パンフレット配布！



球磨中央百貨店（11月29日）の結果！



21,920円 → 51,880円
(R6年10月19日) (R7年11月29日)

2倍

地域資源「地熱」がつなぐ未来

ふるさと熱電株式会社 × 2年生
・イベントでの景品として
カタログギフトを採用！
・webマガジンに掲載中！

牛深高校 × 1年生
(牛深の海産物を活用した地熱茶碗蒸し)
株式会社BYD「ふるさとイノベーションプログラム」
に採択！（3月15日に大阪で発表予定！）

KSH学びの祭典で
年深高生と対面

海×山の幸
牛深の海産物を使用した茶碗蒸し製作

年深高校と
オンライン交流



【球磨中央高校：球磨中央百貨店】

球磨中央高校で行っている「探究的な学び」について

本校の学び 3学科による「探究」の融合

| | | |
|---|---|---|
| <p>地域未来探究科 探究×創造 地域資源の発掘と新たな価値の創造</p> <p>【主な科目】 ●日本の探究・学習の探究 ●英語コミュニケーションI～II ●化学基礎・理科探究</p> | <p>商業科 探究×ビジネス ビジネスのチカラで世の中を動かす</p> <p>【主な科目】 ●簿記 ●マーケティング ●経営研究</p> | <p>情報処理科 探究×デジタル デジタルで未来をデザイン</p> <p>【主な科目】 ●情報処理 ●プログラミング ●ネットワーク活用</p> |
|---|---|---|

球磨中央高校で行っている「探究的な学び」について

「探究的な学び」の実践①～マーケティング～



マーケティングの授業と球磨中央百貨店の様子

球磨中央百貨店の「売れるしくみをつくる」マーケティングの授業～テーマ設定の経緯～

- 球磨中央百貨店では毎年同じ課題を抱えているにもかかわらず、改善されていない現状
- 熊本県版COORE/ハイスchool・ネットワーク事業の一環で小国高校に配信授業。生徒間で協働し、地域課題を探究的に学ぶ。小国高校は、昨年度より「球磨中央百貨店」にカタログギフト等の販売のため出店
- 本校生徒も小国高校の生徒も、どうしたら売れるようになるのか、課題を持つ一共通の課題
- マーケティングの学習内容を球磨中央百貨店運営のフィールドとし、直面する課題に対してマーケティング理論を用いて解決を図るプロセスを構築
- 百貨店実施後、PDCAサイクルを「見える化」し、次年度への改善を行う。

05 協働的な学びを「実践」に

マーケティングの学びを活かした実践ができました！

カタログギフトの販売は昨年度実績を大幅に更新

配信授業と完全連動！

一人ひとりが経営者の意図を持つ

球磨中央高校で行っている「探究的な学び」について

「探究的な学び」の実践②～課題研究～



道の駅で販売実習 ガイド役に挑戦 生徒商業研究発表大会

- 課題研究「チャレンジショップ班」市房食堂とアイス商品を販売！
- 地域と企業と連携した商品開発（商業科・情報処理科 課題研究「チャレンジショップ班」）
- 一過性の取り組みではなく、継続的な販路拡大に取り組み
 - 隣のふるさと納税選礼品に採用される4年前から地元企業とともに開発した商品の継続的な販売・販路拡大に向けて取り組んだ成果が評価された。
 - 地域活性化のための新たな取り組み 鶴町ひみつ基地ミュージアムのガイド役に挑戦中。十分な研修を兼ね、修学旅行や観光で訪れた人にガイドを実施
 - 生徒商業研究発表大会 令和6年度まで県大会10連続 全国大会出場 令和7年度優勝

【牛深高校：ロゲイニング】

01 ロゲイニングの詳細

- ナビゲーションスポーツの一種。牛深の商店街、その周辺に設置されたチェックポイントを巡ってポイントを獲得するゲーム。
- 牛深の地域活性化。経済効果。ロゲイニングを生徒自身で企画することで生徒の『問題発見力』『チャレンジ力』『想像力』を鍛える。
- 牛深の魅力を若い世代に知ってもらいたい。⇒保育園・幼稚園児、10代20代
- 新しい部門に興味を持ってもらい、参加者増加を目指す『競技部門』『ふらっと部門』

02 調査班

活動内容

秋休みの現地調査

- CPの距離を確認
- 距離とポイントが適正か確認

02 店舗班

コラボ商品の紹介

| | |
|---|---|
| <p>天草わら焼き徳</p> <p>雑節・塩おにぎり</p> <p>白身魚・練黒貝・季節の野菜の揚げ物</p> | <p>原蒲鉾店</p> <p>すり身揚げ物</p> <p>イワシの蒲鉾×チョコ</p> |
|---|---|

02 広告宣伝班

RPGゲームのようなデザイン

ターゲットが“子ども”・タイトル「うしぶかウエスト」からゲームの世界のようなデザインにして興味を惹く

SNSのQRコードを貼り付ける

最近情報にいち早く辿り着けるように、表紙に各SNSのQRコードを配置

03 参加者の反応・意見

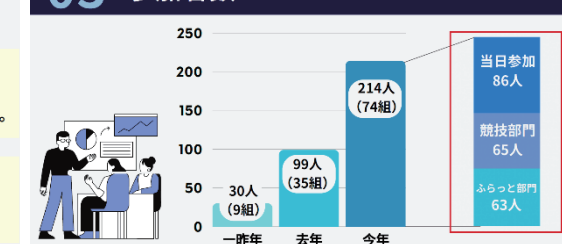
このイベントは牛深の活性化に繋がるか

少しそう思う (19.3%)

そう思う (80.7%)

| | |
|---|----------------------------------|
| <p>普段なかなか行かないお店や場所、道があり学ぶことができました。</p> | <p>40年住んでいて、加世浦の井戸を初めて知りました。</p> |
| <p>大久保利通の想い人の墓があり、明治維新と繋がっていることに感動しました。</p> | <p>牛深のグルメを楽しむことができました。</p> |

03 参加者数



【牛深高校：夏合宿】

熊本版COREハイスクールネットワーク事業



温泉で1泊2日しながら学びませんか

興味があれば大丈夫！

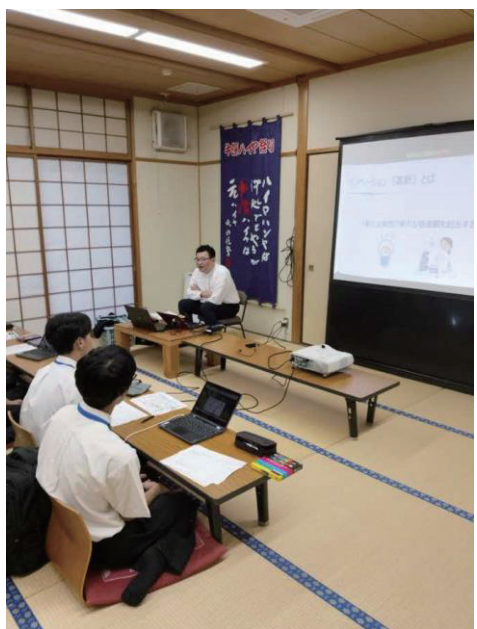
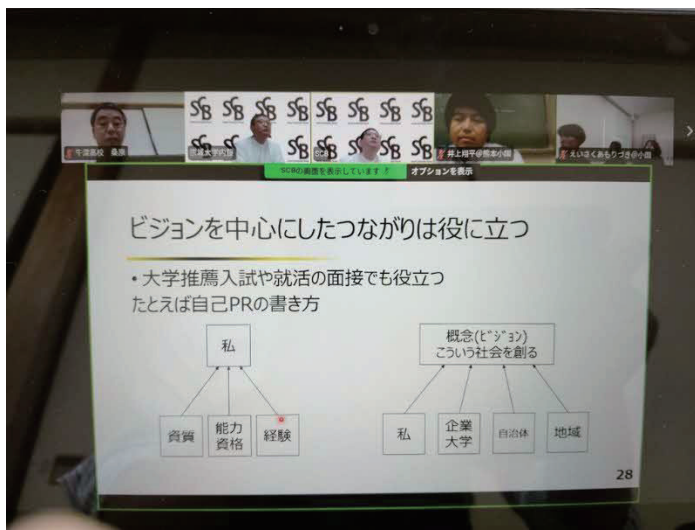
将来地域に貢献できる人材育成を目的とした「夏合宿」です。地域の協力のおかげで、格段の保障で泊まりながら学ぶことができます。日帰り参加及びオンライン参加も可能です。

校内説明会を7月8日(火)16:00～視聴覚室で行います。

| | | |
|--|---|---|
| <p>01</p> <p>ゆるやかなつながりを用いたイノベーション創発講座</p> <p>大学の先生の指導のもと、「つながり」を基礎から学びます。</p> | <p>02</p> <p>大学の先生との座談会</p> <p>ゆっくり温泉に入った後、大学の先生や参加者と自由に対話します。</p> | <p>03</p> <p>イノベーション事例研究</p> <p>「イノベーション」とつながる事例を分析し、成功や課題を学びます。</p> |
|--|---|---|

※「イノベーション」とは 新たな価値観の創出を指します。

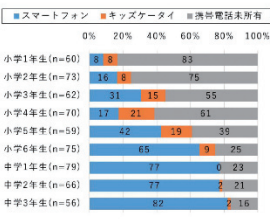
問い合わせ先 牛深高校 桑原



【岱志高校：スマホトラブル防止教室】

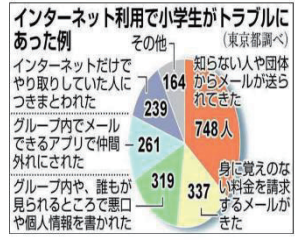
3.小学生のスマホ所持率

現代では、小学生のスマホの所持率は、学年が上がるごとに高くなっていき、小学校6年生時点では約7割の子供がスマートフォンを所持しています。



4.実際の小学生のスマホトラブル

右の図のように、今の小学生はかなりの確率で、様々なスマホトラブルに巻き込まれるケースが多いです。自分たちはその中でも高額請求、課金について注目しました。



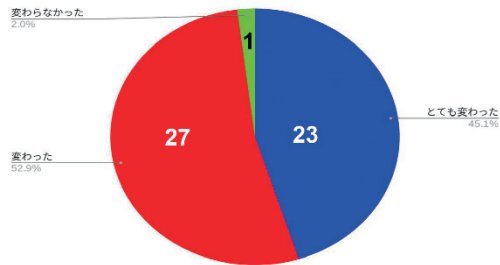
8. 私達の授業

スライドにまとめ、文字や表だけでなく、動画などを使うことによって、さらに分かりやすく伝えた。

また、班活動では、ホワイトボードに意見をまとめ前に張り出すことで沢山の意見を出すことができた。



9. アフターアンケートの結果



1. 第一小学校での反省点

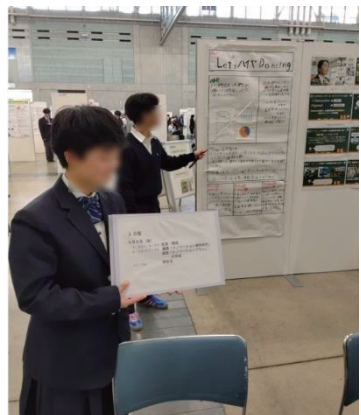
・授業後のアフターアンケートですっかりと理解できていない生徒が少数いたためもう少し噛み砕いて説明するべきだった。

・アンケートでもう少し深掘りするべきだった。

・もう少し予行練習を重ねるべきだった。

・課金は良くないというイメージにしてしまったこと。
(伝えたい意図と伝わった意図の相違)

【県立学校「学びの祭典」】



2.5. 考察

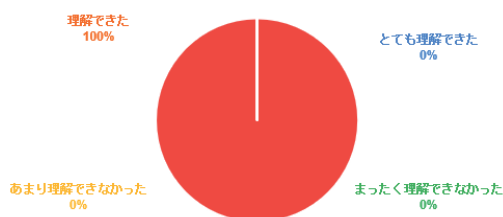
2.5.1. 成果と課題

(1) 生徒アンケートをとおして

令和7年度において、新規開講科目の情報探究を加え、令和6年度までの遠隔授業の内容について今年度さらに発展させることができたと思う。

①数学B及び実践文系数学：小国高校（受信校）対象（受講生徒数3名）

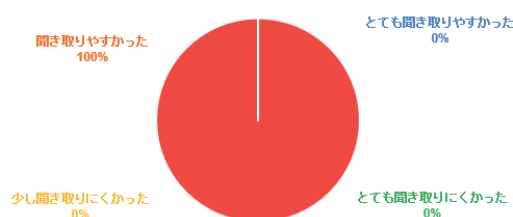
1.数学の学習内容は理解できましたか。



2.数学の授業の映像は見やすかったですか。



3.数学の音声は聞き取りやすかったですか。



【分析】

1 学習内容理解

「理解できた」という回答が占めた。授業担当者の丁寧な対応が生徒の理解度にしっかり反映されているものである。

2 映像の見やすさ

「見やすかった」という回答が占め、良好であった。

3 音声の聞き取りやすさ

「聞き取りやすかった」という回答が占め、良好であった。

4 授業を受けた生徒の感想

- ・進度が自分にはちょうどよくて勉強が捗ったし、配信をしてくださる学校の生徒とも交流があり、刺激になった。
- ・他の高校の先生の授業を受ける機会はなかなかないので貴重な経験になっ

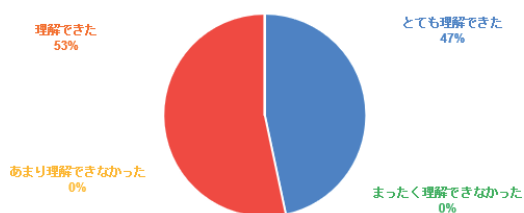
たと感じました。

5 その他

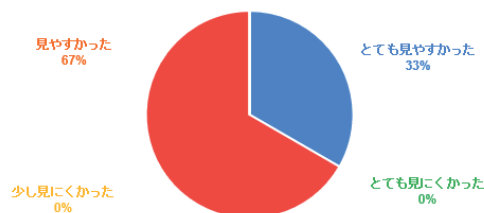
改善点として、写っていない黒板の内容を見たいときに見られないという意見があった。

②マーケティング：小国高校（受信校）対象（受講生徒数11名）

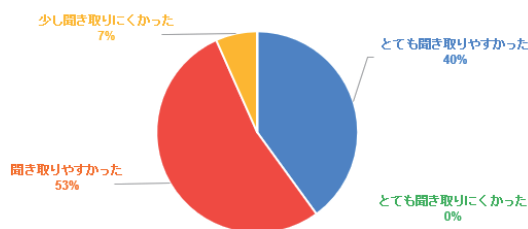
1.マーケティングの学習内容は理解できましたか。



2.マーケティングの映像は見やすかったですか。



3.マーケティングの音声は聞き取りやすかったですか。



【分析】

1 学習内容理解

「とても理解できた」「理解できた」の回答で占めた。受信側生徒のマーケティングに対する興味関心の高さが、理解度の高さに影響があると考えられる。

2 映像の見やすさ

「とても見やすかった」「見やすかった」という回答が占め、良好であった。

3 音声の聞き取りやすさ

「とても聞き取りやすかった」「聞き取りやすかった」という回答が占め、良好であった。一方で音声がたまに途切れ途切りに鳴るとの意見もあった。

4 授業を受けた生徒の感想

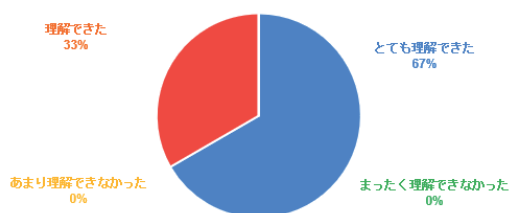
- ・ Google Meet をしっかり活用しておりとても楽しかった。
- ・ 全く違う視点の意見などもありとても深い学びができました。
- ・ 遠隔授業という形で受けてみて実際に対面して授業を受けるのとはまた違

ったよさがあると思った。他校の生徒さんと互いに切磋琢磨しあいながら勉強できるととてもいい機会になった。

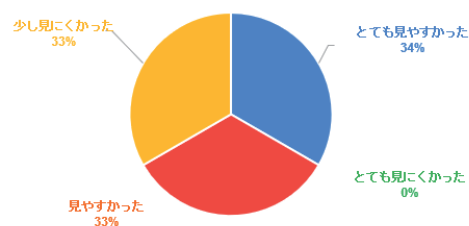
- ・普通高校では学べないことを学ぶことができ、貴重な経験を積むことができた。とても楽しかった。
- ・違う高校の人と遠隔で授業を受けて同じ内容を一緒に学ぶことができ、楽しかったです。
- ・他校の意見を聞く機会がありとても深い学びができました。
- ・遠隔授業を受けてみて、授業も理解できたし、ほかの高校との交流もできていい経験になったと思います。

③発展英語：小国高校（受信校）対象（受講生徒数3名）

1. 発展英語の学習内容は理解できましたか。



2. 発展英語の映像は見やすかったですか。



3. 発展英語の音声は聞き取りやすかったですか。



【分析】

1 学習内容理解

「とても理解できた」「理解できた」の回答で占めた。上級学校進学という明確な目的を持って取り組む生徒の姿と、指導教諭による質の高い学びが遠隔授業でも行われた結果であると考えられる。

2 映像の見やすさ

学校に配備されているクロームブックを用いて、Google Classroom を活用した遠隔授業が行われた。

3 音声の聞き取りやすさ

「とても聞き取りやすかった」が多数を占めた。通信状況によっては音声や映像が乱れることもあった。

4 授業を受けた生徒の感想

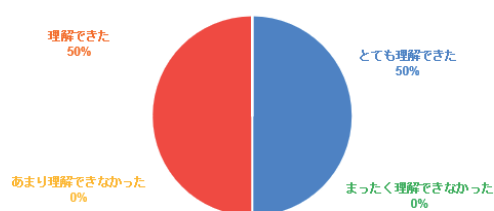
- ・一人ひとりと先生がしっかり関わっていたので、深く理解できていた。また、ポジティブな言葉遣いで私達生徒のモチベーションが高く、学習が捗っていた。
- ・普段の授業と環境がかわるからこそ一層集中できた。

5. その他

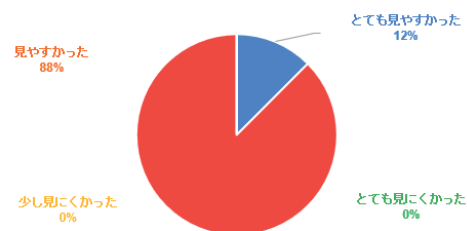
映像や音声の面で意見が割れたが、年度途中から導入した高精細 Web カメラやマイクスピーカーにより、インタラクション（対話）がスムーズになったとのことであった。

④情報探究：牛深高校（配信校）対象（受講生徒数 8 名）

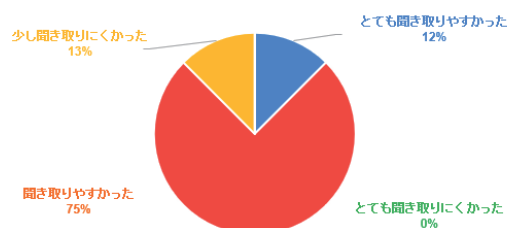
1.情報探究の学習内容は理解できましたか。



2.情報探究の映像は見やすかったですか。



3.情報探究の音声は聞き取りやすかったですか。



【分析】

1 学習内容理解

「とても理解できた」「理解できた」の回答で占めた。受信側生徒の意欲的な授業参加が、理解度の高さに影響を与えたと考えられる。

2 映像の見やすさ

「とても見やすかった」「見やすかった」という回答が占め、良好であった。

3 音声の聞き取りやすさ

「とても聞き取りやすかった」「聞き取りやすかった」という回答が多数となり、良好であった。

4 授業を受けた生徒の感想

- ・遠隔授業でも先生が丁寧に対応してくださり、対面授業と大差がない授業を受講することができました。
- ・遠隔授業で気軽に授業に参加することができました。情報探究についてしっかりと学ぶことができました。
- ・楽しく行うことができました。

【全体分析】

生徒アンケートからも分かるように、学習内容理解の満足度は高い評価になっている。映像や音声については、通信状況や個人の感じ方もあるがより一層機器の性能を上げる必要もあり、今後検討が必要である。一方数学の遠隔授業においては、映像や音声の部分で不満が出ていない。これは数学の遠隔授業だけが、授業者とは別に専任のコーディネーターが機器を操作していたことが大きいと考えられる。

授業を受けた生徒の感想からは、生徒たちが遠隔授業をとおして、学びを深めるとともに、異なる学校の生徒の交流を楽しんでいる姿が見られた。特に、お互い刺激し合うことで、進路目標に対するモチベーションを向上させたり、他地域の実情を知ることによって新たな視点の発見に気づいたりするなど、多くの学びを生徒たちが実感したことは、生徒の生きる力の育成に大きく繋がっている。また、学力の向上だけでなく、他学年・他地域の生徒との交流をとおして、コミュニケーション力の向上や学びの深化にも結びつき、遠隔授業をとおして学力指標だけでは測れない学びが得られていることが分かる。

(2) 目標設定シートに対応した成果と課題

①成果目標・活動目標（生徒の学習成果に関する目標）

遠隔授業受講者の大学進学率の向上

| | 5年度（実績） | 6年度 | 7年度 |
|----------------|---|--------------|--------------------|
| 目標値 | | 40% | 45% |
| 実績値 | 36.6%（15/41人） | 37.5%（6/16人） | 47.8% （11人/23人） |
| 目標設定の考え方 | 遠隔授業受講者（受信側）の大学進学率を確認することにより、遠隔授業の学習効果を確認することができる。 | | |
| 成果把握のための測定方法 | 遠隔授業受講者（受信側）の大学進学率を算出する。 | | |
| 把握のための測定方法及び指標 | 遠隔授業受講者（受信側）の大学進学率を分析した上で、学びのPDCAサイクルの確立と学力向上に向けた取組を支援する。大学に進学した生徒の割合（単位：%）で算出する。 | | |

(成果) 遠隔授業受講者の大学進学率については、令和6年度の実績については37.5%と微増であり、目標値の40%を超えることはできなかった。令和7年度については、目標値の45%を超えることができた。要因としては今年度、牛深高校の大学進学を目指す生徒が情報探究を受講しており、実績値を押し上げたと考えられる。また小国高校の進路実績は、地方の小規模校でありながら着実に結果を残しており、令和5年度には発展英語の学習を通して、海外での学習に興味を持ち海外大学に進学した生徒もいる。

(課題) 大学進学率については、年度末に判明するため、その結果を確実に次年度からの事業に活かせるよう、情報を共有して進めていく必要がある。

②成果目標・活動目標

遠隔授業に係る成果発表会（公開授業を含む）（以下、成果発表会）に参加した高校（他県管理機関等含む）の数

| | 5年度（実績） | 6年度 | 7年度 |
|-----|---------|-----|-----|
| 目標値 | | 20 | 35 |
| 実績値 | 0 | 15 | 9 |

| | |
|----------------|---|
| 目標設定の考え方 | 各県立高校（他県管理機関等含む）が成果発表会に参加することにより、本県で実施している遠隔事業及び通信教育への理解を深めることができ、遠隔授業の普及・促進につながる。 |
| 成果把握のための測定方法 | 参加機関数を確認する。 令和7年度参加機関：県立高校9校 |
| 把握のための測定方法及び指標 | HPや各種研修会等をとおして、取組の最新情報について発信する。成果発表会（公開授業）については、より多くの高校（他県管理機関等含む）が参加できるように、オンライン形式とする。 |

（成果）今年度の成果発表会（公開授業）はオンライン参加で計画し、より多くの高校が参加できるようにした。目標値には届かなかったが、遠隔授業の取組を普及啓発する第一歩はできたと考える。

（課題）成果発表会（公開授業）について11月に実施したが、参加校が想定ほど増えなかった。県内各高校での遠隔授業への関心が高まっていないと感じる。今後、受信校や配信教科が増えていけば、関心は高まっていくと考えられる。

③ネットワーク構成校数及び遠隔授業の実施教科・科目の拡充について

（成果）今年度のネットワーク構成校は第一高校、小国高校、牛深高校、球磨中央高校、岱志高校、教育センターであり、令和6年度から1校増加した。

実施教科・科目数については、令和6年度が3教科4科目であったが、令和7年度は4教科5科目であった。令和8年度は5教科7科目を予定している。これからも生徒のニーズを把握し、生徒の学びたい気持ちを実現できる「教科・科目充実型」の遠隔授業につなげていきたい。

（課題）今後の配信センターの整備に向けても計画及び準備を進めているが、現在行っている学校間連携型の遠隔授業について、今後配信センターを設置することで、どのようにしていくか整理が必要である。学校間連携型の遠隔授業については、配信校側の負担など課題も多いが、配信側、受信側の生徒の交流をとおして、生徒の多様な学びを実現できる貴重な機会になることも事実である。今後、配信センター設置後の学校間連携型の遠隔授業のあり方について、検討が必要である。

2.5.2. 今後の方策

今年度の課題として、配信・受信両校における教員の機材準備や日程調整等の業務負担が浮き彫りとなった。これを解消し持続可能な体制を構築するため、令和9年度以降は新設予定の「配信センター」に業務を順次集約する。あわせて遠隔授業コーディネーター（C I O）を配信センターへ配置し、運用の円滑化と授業の質向上を図る自走計画を推進していく。

また、遠隔授業の質を担保し教員の負担を軽減し続けるためには、ICT環境の整備のみならず、専門スタッフの配置が不可欠である。遠隔授業コーディネーター（C I O）の任用は現状、時限的な予算措置に依存しているが、これを「標準的な定数」としてカウントする、あるいは安定的な財政支援を継続する国の制度設計を強く求める。

さらに、本事業（熊本版C O R Eハイスクール・ネットワーク事業）で構築した学校間連携ネットワークを、令和8年度以降の「N－E．X．T．ハイスクール構想」等の新たな枠組みへ円滑に移行・発展させるための支援も必要である。特に、施設・設備の更新や地方における先端技術活用に係る経常的な経費支援は、地域教育の自走化を支える基盤として極めて重要である。

3. 通信教育の実施やその運営体制に関する取組

3.1. 調査計画

本県では、令和9年度の配信センター設置の検討を進めており、配信センターを中心拠点として通信教育のあり方についても協議を行っている段階である。令和7年度は県立高校の希望する全ての2年生の生徒を対象に、長期休業中に集中講座を教育課程外で実施した。

3.2. 実施体制

通信教育の中心拠点は令和9年度開設予定の配信センターを予定している。運営及び通信教育に関する業務については、遠隔授業を担う配信センターの教員が行う。授業日の遠隔授業に係る業務を行うとともに、集中講座に係る業務も進めていく必要がある。

今年度については管理機関が中心となり、県内の指導教諭と連携し県立教育センターからの配信を実施。集中講座の受講者への連絡については、Google Classroomを活用して、各講座担当者から周知するシステムを構築した。

○通信教育（集中講座）に係る管理機関の業務について

- ・開講講座、担当指導教諭、日程の策定
- ・学校への周知
- ・集中講座に係る諸連絡
- ・集中講座の配信
- ・集中講座後の受講者に対するアンケート調査・分析等

3.3. 取組概要

○通信教育（集中講座）実施までのスケジュールについて

- ・6月上旬：夏季休業中における集中講座の開講講座、担当指導教諭、日程の策定
- ・7月上旬：県立高校の2年生を対象に夏季休業中における集中講座の受講希望調査
- ・8月上旬：夏季集中講座実施
- ・8月中旬：夏季集中講座の受講者に対するアンケート調査
- ・11月下旬：冬季休業中における集中講座の開講講座、担当指導教諭、日程の策定

- ・ 1 2 月上旬：県立高校の 2 年生を対象に冬季休業中における集中講座の受講希望調査
- ・ 1 2 月下旬：冬季集中講座実施
- ・ 1 月上旬：冬季集中講座の受講者に対するアンケート調査

3.3.1 通信教育実施表

今年度、本県では通信教育の実施については行うことはできなかった。しかし通信教育へ繋げる調査研究の一環として、長期休業中の集中講座を実施した。

3.4. 取組内容

○長期休業中に実施した集中講座の内容について

【夏期集中講座】

- ・ 実施時期：令和 7 年 8 月 1 日（金）・ 8 月 5 日（火）の 2 日間
- ・ 配信元：教育センター
- ・ 講座内容：

○英語：「イマジネーションで取り組む大学入試レベルの問題」

・ 授業者（ST）コメント

長文読解を行う上で重要なのは英語の長文をまるっと日本語に落とし込むことではありません。むしろ、与えられた情報でイメージを膨らましたり、場面を視覚化したりすることが大事です。基本的な知識はもちろん大事ですが、その一歩先に進みたい人のお手伝いをできればと思っています。

○数学：「九大クラスを目指すあなたに

～ 基本から取り組んでここまでいける ～」

・ 授業者（ST）コメント

九大クラスの数学の問題も、基本の積み重ねでできています。計 1 3 0 分の講座で、基本的な問題から始め、最後は九大クラスの問題が解けるところまで高めていく予定です。

さらに、解いていく過程で、学力を九大クラスまで高めるために必要な学習法や考え方などをお話ししていきたいと思っています。

- ・ 講座数：2 講座
- ・ 回数：1 回

- ・ 講座形式：リアルタイム配信
- ・ 参加資格：全ての県立高校の2年生の生徒
- ・ 受講料：無料
- ・ 会議システム： Google Meet

【冬期集中講座】

- ・ 実施時期：令和7年12月25日（木）・12月26日（金）の2日間
- ・ 配信元：配信担当者が所属する学校（済々黌高校）
- ・ 講座内容：
 - 物理（基礎）：「力の作図から運動方程式」
 - ・ 授業者（ST）コメント

高校物理で最も重要で基本的である「運動方程式」をマスターすることを目的とする講座です。物理の授業で、最初のほうから躓いてしまった人のために、力の作図から始めます。最終的には、親亀子亀問題を扱います。
 - 物理（応用）：「九大を目指したい人のために～九大頻出問題「単振動」～」
 - ・ 授業者（ST）コメント

「単振動」は難しいと言われますが、最も単純な形の振動です。この講座は、単振動だけに特化した内容です。基本から始まり、最終的には「つりあいの位置を原点とした単振動の力学的エネルギー保存則」を扱います。
 - 数学：「大学入試問題の見方、考え方、そして解き方
～九大クラスの問題への対応力を身につける～」
 - ・ 授業者（ST）コメント

模擬試験の問題や、大学入試問題を見て、「どこから手をつければよいのかが分からない」という人は多いです。特に九大クラスの問題になると、一見ただけでは方針が浮かばない問題も見られます。

実はそのような問題のほとんどは、見方を工夫することで既習の内容の組合せで解けるようになっています。

この講座では、熊大・九大等の入試問題を利用して、入試問題の見方、考え方、解き方について学ぶとともに、この冬からの学習への取り組み方についてもお話ししたいと思っています。
- ・ 講座数：3講座

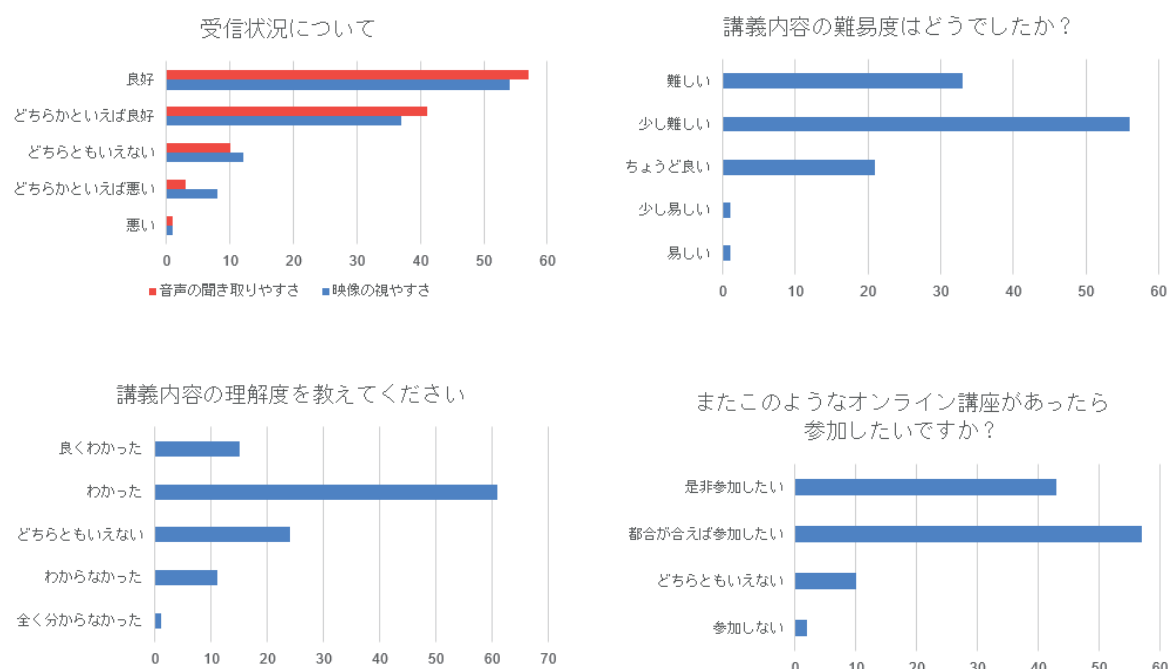
- ・回数：1回
- ・講座形式：リアルタイム配信
- ・参加資格：全ての県立高校の2年生の生徒
- ・受講料：無料
- ・会議システム：Google Meet

3.5 考察

3.5.1. 成果と課題

○生徒アンケートをとおして

【夏季・英語】アンケート回答数 112名

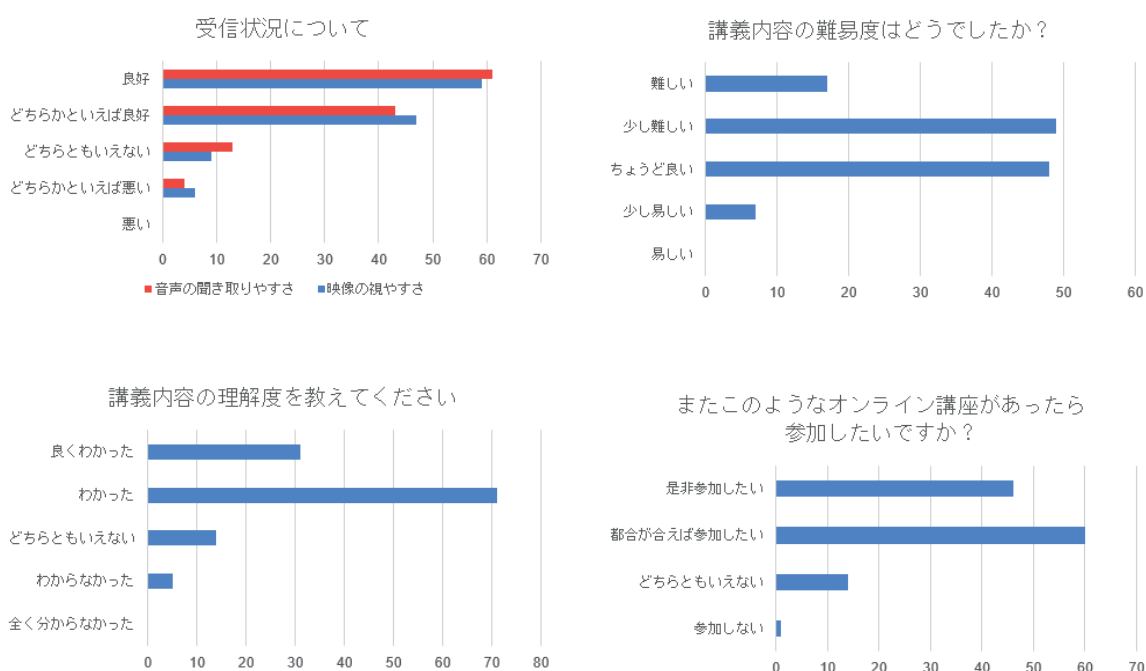


生徒の感想

- ・65分と普通の授業よりも長いはずなのに、今日の講座のほうが短く感じ、とても良かったです。
- ・イメージしてくださいとおっしゃることが多く、普段より簡単に読めた気がしました。これからも場面や人物像をイメージしながら英文を読んでいきたいと思います。
- ・楽しかったです。難しかったのと、わからない単語が多くて、イメージーションの段階までいかなかったのが、知識不足がわかりました。
- ・とても理解しやすい授業でした。対面でなかったことが少し残念です。

- ・長文読解をする上で、英語力だけでなく想像力、文の流れから頭の中で画像としてイメージしながら読み進めていく楽しさを感じられました。
- ・初めはイメージが上手く掴めず苦戦しましたが、後半に行くにつれて想像しながら読むのが楽しくなってきました。すごくわかりやすく楽しい授業でした。

【夏季・数学】アンケート回答数 121名



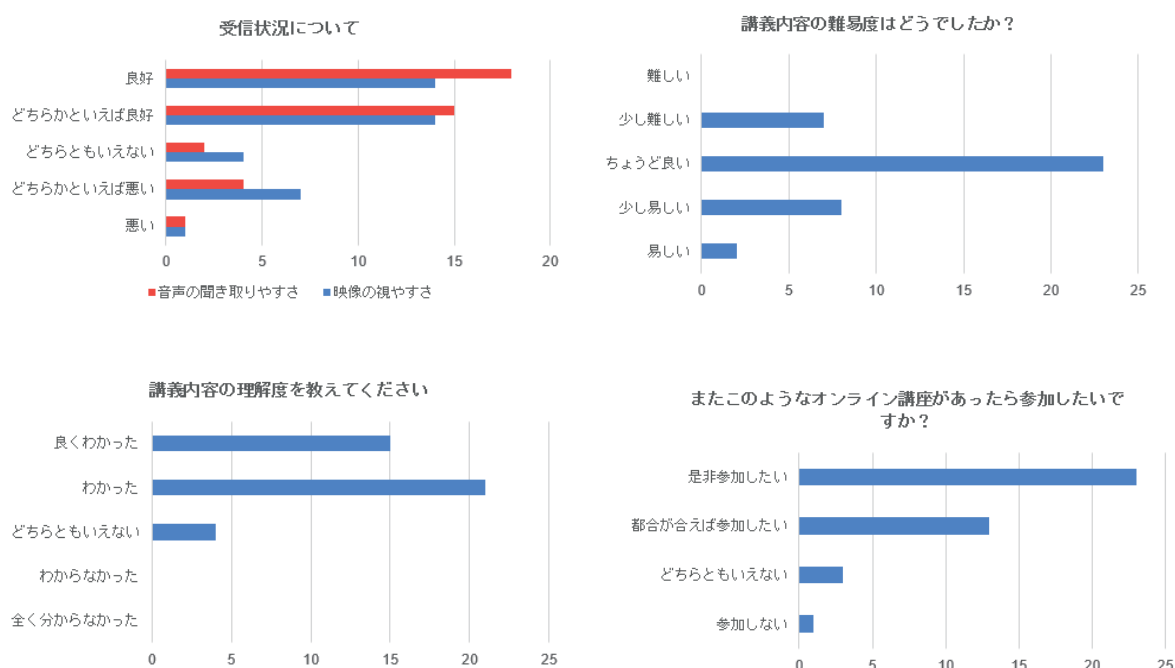
生徒の感想

- ・難しかったけど、分からなかった単元を理解することができて良かったです。
- ・問題からその大学が求める人間が分かるのが面白いと思った。
- ・基礎知識からどうやって解くことができるかを考えることが大切だと分かったので、まずは基礎をしっかりと固めようと思いました。
- ・ただ解き方を教えるのではなく、様々な問題にも立ち向かえるように考え方を教えてください、これからの数学の自主学習においてとても参考になった。小さなことの意味を一つ一つ丁寧に説明して下さったので分かりやすく、よく理解できた。
- ・数学科の教員として参加させていただきました。生徒達とともに教室で、画面を投影しながら受講させていただき、生徒達の様子を間近で見ることができました。九大レベルの問題にどのようにアプローチしなければならないの

か、そのために日々の学習でどのようなことに気をつけなければならないかを大変わかりやすく教えていただき、生徒たちは受講後「自分の力でここまでできた！」と嬉しそうに話している様子がありました。生徒の刺激になるとともに私自身の刺激にもなりました。

- ・ただ解くだけでなく自分なりに筋道を立てることが大切だとわかりました。まずは自分の力で解くことを意識していきたいです。

【冬季・物理基礎】 アンケート回答数 40名



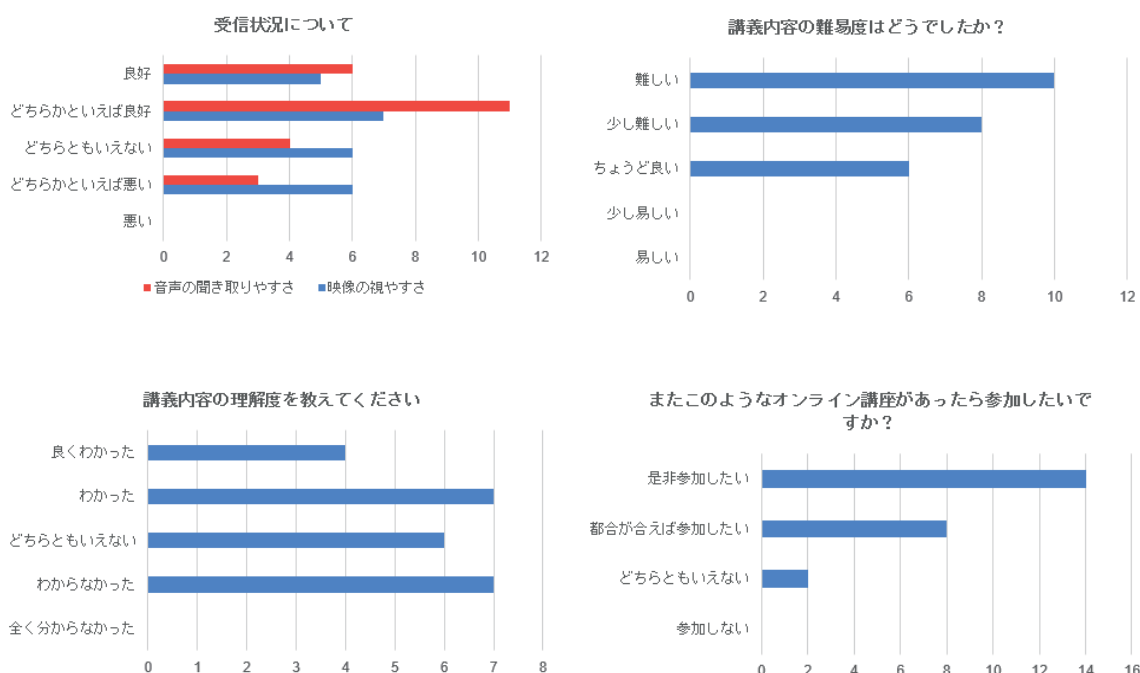
生徒の感想

- ・運動方程式の作り方が改めてよくわかりました。図や問題文を見ると難しく感じる問題も手順をきちんと追っていくことで解きやすくなるんだなと思いました。
- ・高3ですが、摩擦のところが苦手だったので、知識や解き方をうまく整理できてよかったです。
- ・途中スライドの画質が荒く見にくかったです。
- ・高校の職員です。生徒と一緒に視聴しました。復習のように生徒たちは受講することができていたようです。感想に「5時間分の授業を受けたようだ」「親亀子亀問題がわかって嬉しい」などの声が聞かれました。
- ・解説のあとに問題を解くという方式がいいと思った。基礎的なことが理解で

きたので参加して良かったと思う。

- ・自分は力学のグラフを必要なものすべて書き出すことがあまり得意ではないのですが、今回の講義で少しでもかけるようになったのかなと思います。
- ・資料が前日に配信され、印刷をする時間が取れなかったのが、早めに配信があるとありがたいです。

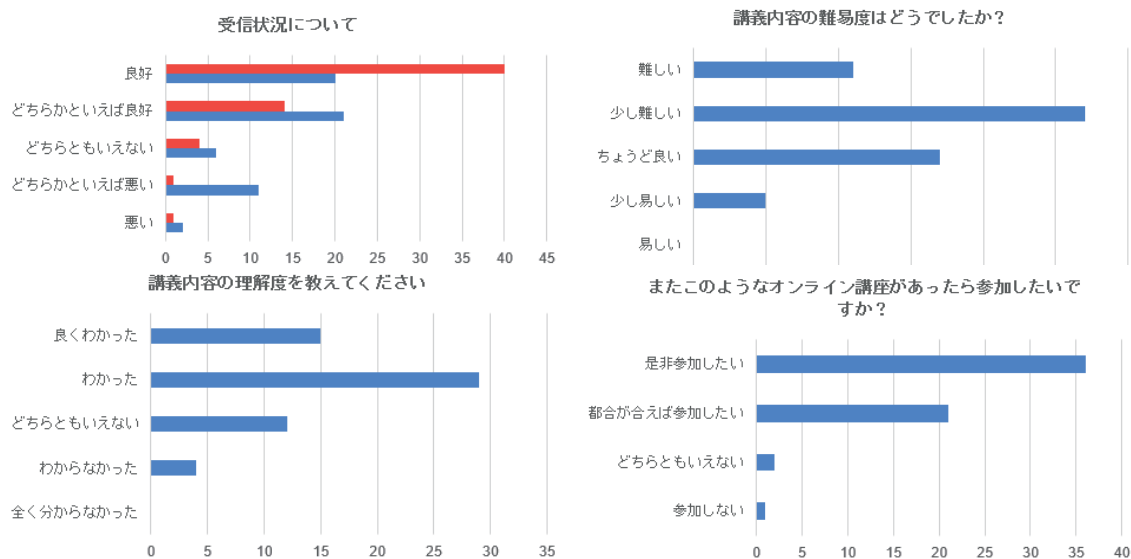
【冬季・物理応用】 アンケート回答数 24名



生徒の感想

- ・単振動は物理の中でも特に苦手な分野なのですが、今までとは違う見方で問題を解けるようになりました。
- ・重要な部分を重点的に解説してくれたので質の高い理解が出来た一方、途中、解説にメモが追いつかないことがあったため、もう少しメモの時間も欲しかった。
- ・難しかったです。基礎から身につけてまた聞いてみたいです。
- ・高校の職員です。参加した生徒たちは難しく感じていたようですが、粘り強く受けていました。自分の学校では扱われないような問題でも扱っていただいていた生徒たちには励みになっていたようです。

【冬季・数学】アンケート回答数 60名



生徒の感想

- ・数学の解き方に悩んでいたのが参考になりました。
- ・どれも本当に有益な情報で問題を解いて解説するだけでなく、これから難しい数学の問題を解くうえでの心構えや立ち向かい方について説明していただき、本当に充実した時間でした。
- ・大学入試問題で重要な点を理解しやすいメッセージ性のある問題が選ばれていて受験に必要なことがよくわかった。
- ・私は教科書の例題レベルの問題を解くことで精一杯になっていて、最初のウォーミングアップの問題から解き方がわからなかったのもっと多くの解法やなぜその解法を用いるのかを理解し、解ける問題のレベルを上げていきたいなと思いました。
- ・どうしてその解き方をするのか、回答までの筋道を丁寧に説明されていて分かりやすかったし面白かった。
- ・今日の講義を通して自分のやるべきことが明確にわかりました。
- ・ウォーミングアップの問題で正解することができず悔しかったので冬休みに復習を頑張ろうと思いました。今回始めて受講してとても面白かったので機会があったらまた参加したいです。
- ・高校の職員です。生徒と一緒に受講しました。普段教師も説明できないような問題を扱っていただき、大変有難く思いました。説明が洗練されていて、

理解していく生徒の姿をしっかりと見ることができました。着眼点や声掛けなど私の授業の参考にさせていただきます。

- ・とても分かりやすい解説で、これから数学を学んでいくうえで大切にしてい
く考え方も知ることができました。

【分析】

1. 学習内容理解

全体として理解度が高く、高評価であった。冬季の物理応用など難しい講座は理解度が下がったが、また参加したいという項目は高く、受講生の前向きさが見て取れる。

2. 映像の見やすさ

夏季に比べて冬季ははっきりと評価の低下がある。これは夏季は県立教育センターから HD コムのカメラを使用した配信だったが、冬季は配信担当者の学校から家庭用ビデオカメラでの配信を行った。この差が出たと考えられる。遠隔授業においては、使用する機器が重要だと改めて感じた。

3. 音声の聞き取りやすさ

夏季と冬季を比べて顕著な差は見取れない。音声については特に問題はなかった。

4. 総括

今回の集中講座を担当した指導教諭（スーパーティーチャー）の授業力が高く、受講生の満足度は高いものであった。今回初めて遠隔授業に携わった指導教諭もあり、遠隔授業の経験を積むことで更に受講生の満足度の高い遠隔授業になると考えられる。

3.5.2. 今後の方策

今年度実施した長期休業中の集中講座では、部活動等の制約がある時間帯にもかかわらず、延べ400名を超える生徒が受講し、多様な学習ニーズの高さが実証された。今後はこの成果をさらに発展させ、時間や場所の制約を完全に解消するため、講座のオンデマンド配信や、單元ごとのマイクロレクチャー化（短時間・細分化）によるアーカイブ構築を推進する。これにより、生徒の進路志望や習熟度に応じた「個別最適な学び」を可能とするカテゴリ別講座の提供体制を確立する。令和9年度に新設予定の「配信センター」を核として、これらのデジタルコンテンツを蓄積・一元管理することで、各校の教員負担を軽減しながら、質の高い教育資源を全県に流通させる自走モデルを構築していく。

一方、こうした高度な通信教育を持続可能なものとするためには、国の継続的な支援が不可欠である。特に、大容量の動画アーカイブを運用するためのクラウド利用料や、生成AI等を活用した学習支援システムに係る「経常的な経費支援」の制度化を求める。また、教材制作や著作権処理、受講管理を専門的に担うスタッフを、一時的な予算措置ではなく「標準的な教職員定数」としてカウントする等の抜本的な制度設計が必要である。さらに、これらアーカイブ学習の成果が教育課程内でより弾力的に単位認定されるよう、さらなる規制緩和と評価基準の明確化を期待する。

4. まとめ

■遠隔授業に関する考察と総括

本事業の2年間を通じ、「教科・科目充実型」の遠隔授業は、地理的条件に左右されない高度な学習機会の提供という目的(1.1)を概ね達成した。特に今年度、新規開講した「情報探究」等において、配信側の専門性と受信側の個別フォローを組み合わせることで、生徒の学力向上だけでなく、ICTを活用した対話的な学びの深化が確認された。これは、1.2に掲げた「効果的な指導法」や「受信教室の体制」を明確化する大きな成果となった。特に遠隔授業コーディネーター(CIO)の配置は、教員の校務負担軽減と授業品質の安定に不可欠な役割を果たし、持続可能な運営体制のモデルを確立できたと考える。

一方で、新たな課題として、機材の経年劣化に伴う更新費用の確保や、配信・受信校間でのさらなるカリキュラム調整の難しさが浮き彫りとなった。今後は、これらの成果を「N-E. X. T. ハイスクール構想」における改革先導拠点へと引き継ぎ、CIOの定数化や経常的な経費支援を国に求めつつ、県内全域への普及・定着を図ることが求められる。

■通信教育に関する考察と総括

通信教育については、長期休業中の教育課程外における集中講座を軸に、生徒の多様な学習ニーズに応える柔軟な学びの構築(1.1)を目指した。今年度、延べ400名を超える生徒が受講した実績は、部活動等と両立しながらも高い学習意欲を持つ生徒が地方部にも多数存在することを証明し、1.2で示した「通信教育の有効性」を強く裏付けるものとなった。Google Classroomを活用した配信センターから生徒への直接的な連絡体制は、各学校の事務負担を抑えつつ、質の高いコンテンツを迅速に届ける運用モデルとして機能した。

今後の課題および新たな課題意識として、現状の「一斉ライブ配信」だけでは解消しきれない個別の進路志望や習熟度への対応が挙げられる。今後は、本事業で得た知見を活かし、コンテンツの「マイクロレクチャー化(短時間・細分化)」や「オンデマンド配信」への移行を加速させ、生徒が自らのタイミングで最適な単元を選択できる環境を整備する必要がある。令和9年度の配信センター設置を見据え、デジタル教材の蓄積・管理体制の強化へ向けた検討を進めていく。

5. 本事業の成果と課題を踏まえた今後の方向性

本事業の2年間を通じ、地理的・環境的制約に左右されず、生徒が自らの志向に応じた高度な学びを選択できる基盤が構築されたと感じている。今後は、本事業で得られた知見を「N-E. X. T. ハイスクール構想」の核心に据え、単なるICTの活用に留まらない、次世代型の教育改革へと昇華させていく。

具体的な方向性として、令和9年度に設置予定の「配信センター」を県内全域の遠隔教育の司令塔と位置づけ、運用の自走化を図る。遠隔授業においては、「球磨中央百貨店」のような既存の教育資産と遠隔システムを融合させた探究型学習をさらに拡充し、実社会との接点を重視した「生きた学び」の普及を推し進めたい。これにより、地方小規模校においても都市部と同等、あるいはそれ以上の専門的な教育機会が保障されると考える。

通信教育については、集中講座での延べ400名を超える受講実績を重く受け止め、一斉配信型から「マイクロレクチャー化（短時間・細分化）」や「オンデマンド配信」を主軸としたアーカイブ型学習へと移行する。生徒が自身の進路志望や習熟度に合わせて、時間と場所を選ばずに学べる環境を構築し、部活動や地域活動と両立可能な「個別最適な学び」のプラットフォームを完成させたい。

これらの取組を持続させるための最重要課題は、専門スタッフ（CIO等）の安定的な配置と、先端技術の維持に係る経常的な経費の確保である。本事業で実証された「教員の負担軽減」と「学習効果の向上」というエビデンスを基に、CIOの定数化や予算措置について国への要望を継続しつつ、県独自の持続可能な運営体制を構築する。

事業終了後、本県は「遠隔・通信教育」を特別な試みではなく、県立高校における教育の「標準的な形態」へと定着させたい。これにより、生徒一人ひとりが予測困難な社会を生き抜く※エージェンシーを育めるようにし、地域と共創しながら自らの可能性を最大限に広げ、未来を切り拓いていける環境の構築を目指す。

※エージェンシー：変化を起こすために、自分で目標を設定し、振り返り、責任をもって行動する能力

令和7年度指定
「各学校・課程・学科の垣根を超える高等学校改革推進事業
（学びの機会の充実ネットワークの構築）」
（熊本版COREハイスクール・ネットワーク事業）
研究開発実施報告書（2年次）

令和8年3月発行

発行者 熊本県教育庁県立学校教育局高校教育課
住所 〒862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺六丁目18番1号
電話 096-333-2685 FAX 096-384-1563

印刷所 株式会社アクセス
住所 〒862-0971 熊本県熊本市中央区大江4丁目16番1号
電話 096-372-1010 FAX 096-373-1313